

[特集：比較教育学とボーダースタディーズ]

特集によせて

川久保 文紀

本特集では、近年進みつつある比較教育学とボーダースタディーズの対話について取り上げる。ボーダースタディーズ(境界研究)は、境界／国境(ボーダー)を切り口として、多様な研究領域を接合するプラットフォームとして進化を遂げてきている。それは伝統的には、地理学、国際法、人類学などの強い影響を受けながら、その方法論的広がりには他の人文社会系分野にも及び、学知の協働によって成り立つ融合領域である。この意味において、境界・国境地域(borderlands)を分析対象としながら、周辺部からのまなざしを重視する比較教育学との対話は、ボーダースタディーズの新しい理論的地平を切り開き、その研究フィールドの裾野を広げる上でも有益な試みとなる。本特集は、次の4つの論考から成り立っている。

まず、荻巣崇世論文「『境界』としての学校—カンボジアの学校教育を通じたベトナム系住民の排除と包摂—」では、排除と包摂の両方を分析の視野に入れるボーダースタディーズの知見を生かしながら、学校教育における「透過性(permeability)」や「境界づけ(bordering)」の問題に迫っている。そこでは、カンボジアの学校教育におけるベトナム系住民を事例としながら、教育のステージばかりではなく、地理的・時間的な要因や第三者による介入などの外的要因によって、学校教育における透過性が変動する事実を明らかにしている。すなわち、学校教育における排除と包摂のプロセスは、教育に関する法や政策のレベルで前提とされる排除から包摂への一方的かつ単線的なものではなく、教育現場の境界実践によって常に流動するプロセスとして理解するのが妥当であるという見方を提示する。

鴨川明子論文「サバ州におけるインドネシアにルーツを持つ子どもの就学機会とその課題—国境・境界地域に行き届く国民教育の透過性—」では、国境を越えるインドネシアの国民教育と国境・境界地域に行き渡るマレーシアの国民教育が同時に併存するマレーシアのサバ州を事例としながら、近年増加するインドネシアにルーツをもつ子どもの教育機会の現状と課題を検証している。このなかでは、ボーダースタディーズにおける「透過性(permeability)」概念を用いて、国境・境界地域にみられる教育現象の一断面を分析し、国民教育の全体像を描出しようと試みている。

劉靖、北村友人論文「中国の国境地域における『国門学校』の現状と課題—政策文書ならびに学術論文の分析にもとづく—」では、中国の境界・国境地域に存在する「国門学校」を取り上げながら、その役割を考察している。国家の教育政策や国民教育制度に関する研究により、それらの対象となる代表性や一般性について分析する比較教育学のアプローチに対して、境界・国境地域の人々や組織に関する特殊性や差異性を描き出すボーダースタディーズの方法論を導入することによって、「国門学校」の実態に迫ろうとする。とりわけ、国境の「こちら側」と「向こう側」の双方に分析の焦点をあてることにより、境界・国境地域で生起する現象を動的に捉えるボーダースタディーズの方法的視座は、国民国家を分析の基礎においてきた伝統的な比較教育学研究では十分に把握できなかった教育事象に関する理解を促進すると主張する。

乾美紀論文「ラオス北部中国国境地域における教育観の変化に関する研究」では、2013年に中国が提唱した「一帯一路」構想の進展を契機として、中国国境に近いラオス北部の境界・国境地域におけるラオス人の教育観がどのように変化してきたのかについて、現地のフィールド研究で得られた資料やデータをもとにしながら明らかにしている。中国とラオスの関係は近年急速に緊密化し、ラオスの中国への依存状況がますます深まるなかで、ラオスにおける学校教育の課題は、ラオス固有の文化を維持・継承しながら教育制度を整備・発展させていくことであると論じている。

本特集に掲載された論考に共通する点は、制度としての国民国家や国民教育を相対化することであり、境界・国境地域を舞台とした越境するアイデンティティを多角的に考察しているということである。これらの論考の分析からは、国家が国民教育の普及という名目のもとに確立した教育制度と、ハイブリッドな要素が混在する境界・国境地域における教育現場の実態との齟齬が、東南アジアと中国というアジアの広域的な視角から垣間見えたともいえる。比較教育学が重視するフィールド研究は、分析対象となる境界・国境地域について一定の時空間の枠組みを設定しながら総体的に把握しようとする点において、国家やその制度を分析単位としがちな地域研究(エリアスタディーズ)を乗り越える視座を有しており、ボーダースタディーズとの理論的親和性が認められる。また4つの論考からは、フィールドに密着する形で現地において入手した資料やデータと格闘し、単なる事例の紹介や個性記述的な分析に陥らない、仮説と実証から導出される法則性を見出そうとする知的営為も読み取れる。

異なるディシプリンを架橋する作業は常に困難を伴うが、みずからが立脚するディシプリンを複眼的に捉え直し、新しい対話への道筋をつける作業とも軌を一にしており、新鮮な感覚に浸ることができる。本特集を企画するにあたって、意欲的な論考をお寄せ頂いた各執筆者にお礼を申し上げると同時に、企画の初期段階からご助力頂いた東京海洋大学の森下稔教授と市川桂准教授にも感謝の意を表したい。